

城下の町並み

天方三城のうち白山城(城敷)の下にあるから城下と言われています。太田川の堤防に沿って町並みが続いていて、小売商や料理屋、旅人宿などのほかにいろいろな職人が暮らしていました。ここは森の町との間に天宮の峠があったため、山間の村々では日用品は城下で用立てることが多かったそうです。

秋葉信仰と森町

秋葉山が火防の神(守護神・三尺坊大権現)として有名になったのは江戸時代の頃です。庶民は秋葉講という組織をつくって秋葉山に代参し、講中安全と火災消除を祈念して御札をもらい、講中で秋葉講お日待を行いました。

秋葉山への参詣道となる秋葉街道は、古くは塩の道であり、信仰の道や生活の道、交易の道でもありました。森町村は秋葉街道の宿場としてにぎわい、今も残る秋葉常夜灯が当時をしのばせています。

旧城下学校

城下学校は1884(明治17)年に建てられた校舎で、旧見付学校、旧岩科学校に続く県内に残る3番目に古い学校建築です。東西に長い平屋建ての木造校舎は、中央の玄関を入ると一室の大空間で、東側に講義の上段と床の間が設けられているのが特徴です。

明治時代、森町には多くの学校が造られました。先人たちがいかに人材教育に力を入れていたかがわかれ、多くの偉人を輩出しています。城下学校は教育の町を証明する建物です。



森町出身の挿絵画家●富永謙太郎の旧別荘

旧城下銀行の建物



森町消防団発祥の地

石碑によれば、森町の商人の加藤貞治郎が、明治10年10月に江戸消防の一員だった城下村出身の田辺宇七を呼び、城下谷本組が発足、当時最新鋭の手押しポンプが配備されました。静岡県西部で初めての消防組織で、これをきっかけに森町各村で消防組が創設され、明治37年に森町消防組合が設立されました。城下は森町消防団のルーツとなっています。

ノコギリの歯のような城下の町並み

秋葉街道に接している家は間口の一部分が道に接していても間口が街道と平行でないため、三角の広場ができています。どの家も同じようになっているので、上から見るとちょうどノコギリの歯のように見えます。この町並みは、三角の広場に隠れていて、敵が来るのを待ち伏せするためにできたという伝承がありますが、実際は城下の町並みは曲線の自然堤防の上に作られたので、隣の家と少しずつずらして作らざるを得なかった、というのがその理由です。

※民家を見学・撮影の際は住民のプライバシー保護にご配慮をお願いします。町家や土蔵の内部は一部を除き一般には公開されていません。

森・天宮の町並み

古くから地域の拠点的な位置にあった森町村(森市場)は、三島神社が鎮座する山「森山」にちなんで村の名がつけられたといわれています。中世の市場通りは太田川の水害に見舞われることが多かったため、戦国期から整備された町割りが、本町・仲町・横町・新町の今の町並みとして残っています。

発明王で日本製糖業の父・鈴木藤三郎

1855(安政2)年、遠州森に生まれ、5歳で菓子匠鈴木伊三郎の養子となりました。19歳で家督を継いだ後、1833(明治16)年に氷砂糖の国内製造に成功したのを皮切りに、白糖製法、醤油醸造法、製塩機、生糸乾燥装置など広い分野で自ら工夫を重ね、技術開発につとめました。生涯で159件の特許を取得、日本の産業革命を牽引した一人です。



土蔵や町家が残る町並み

森町村は掛川宿から秋葉山にいたる秋葉街道の沿道に当たり、主要な宿場町でした。商家・旅籠も多くあり、北遠からの茶・木材・椎茸などの集散地として、また海浜からは塩や乾物が集まり、人や物の移動が活発だったことから賑わいをみせていました。現在も残る古い町並みや土蔵に、当時の面影を見ることができます。

1577(天正5)年に徳川家康が森市場に出した禁制